

Title	14世紀イスラームの医学観： 『医学と医者が必要であることの証明』 翻訳 (2)
Sub Title	Image of medicine in 14th-century Islam : Japanese translation of Bayān al-ḥāḡa ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbā' (2)
Author	矢口, 直英 (Yaguchi, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.51 (2020. 3) ,p.287- 304
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0287

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

14世紀イスラームの医学観： 『医学と医者が必要であることの証明』 翻訳 (2)

矢口直英*

I. はじめに

本稿は、クトゥブッディーン・シーラーズィー *Quṭb al-Dīn al-Šīrāzī* (1236–1311年) による医療倫理書『医学と医者が必要であることの証明』 *Bayān al-ḥāḡa ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbā'* (以下『証明』) の翻訳である。今回は第2章と第3章と、それに続く議論の1つを訳出する (底本18–34頁)¹。

翻訳の前に新たな情報を述べておきたい。『証明』はシーラーズィーによるイブン・スィーナ *Ibn Sīnā* (1037年没) 『医学典範』 *Al-Qānūn fī al-ṭibb* 注釈『医学についてのサアドへの献上品』 *Al-Tuḥfa al-Sa'dīya fī al-ṭibb* (以下『注釈』) の抜粋から構成されていることが明らかとなった。紙面の都合上ここで詳細を述べることはできないが、『証明』は『注釈』第2部末、第3部冒頭、第4部末にある文章がいくらかの修正を受けて1冊の書物に編纂されたものである²。

本翻訳の底本として、*Quṭb al-Dīn al-Šīrāzī, Bayān al-ḥāḡa ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbā', wa-ādāb-hum wa-waṣāyā-hum*, ed. Aḥmad Farīd al-Mazīdī (Beirut: Dār al-

* 日本学術振興会特別研究員

1 (1)は『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第49号 (2018)、235–249頁。

2 矢口直英「13世紀イスラームの医学擁護：クトゥブッディーン・シーラーズィーの伝統的議論」『科学史研究』第III期57巻 (2019)、250–265頁を参照せよ。

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第51号 (2020) pp.287–304

Kutub al-‘Ilmīya, 2003) を使用した。また翻訳で参照する文献として、以下のものを挙げる。

- ・ Ibn Sīnā. *Al-Qānūn fī al-ṭibb*. 3vols. Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, 1999.
- ・ Kühn, C. G. *Claudii Galeni opera omnia*. 20vols. Leipzig: Cnoblochii, 1821–33.
- ・ Littré, É. *Œuvres complètes d’Hippocrate*. 10vols. Paris: J. B. Baillièrre, 1839–61.

II. 翻訳

第2章：医者が必要とする学問について

知るべし。医者は、諸学問をまとめて有していなければならない。

①第1[の学問]——欠いてはならない重要なもの——は、論理学al-mantiqのうち5つの普遍³についての知識を有することである。[医者は] 2つの理由からそれを必要とする。1つ目は、病気の定義、その種々の定義、その記述の知識が必要となり、定義ḥaddは類ġins, 特性ḥāṣṣa, 種差faṣl, 記述rasmから構成されるからである。2つ目は、病気を特定するために、[該当の] 病気は何であるか mā huwaを知り、そして単純なものと同複合のものという2区分に分けねばならないからである。単純なものは3区分、つまり混質の悪化sū’ mizāġ, 構造の悪化sū’ tarkīb, 連続性の分断tafaruq ittiṣāl⁴に分けられる。混質の悪化は、質料型māddīと純一なものsādiġという2区分に分けられる⁵。質料型は、黄胆汁質のものと同黄胆汁質ではないものに分けられる。黄胆汁質の質料型は、発熱であったり、それ以外であったりする。黄胆汁質の質料型の発熱は、純粋な黄胆汁からであったり、そうでなかったりする。純粋な黄胆汁

3 論理学における5つの普遍とは、類ġins, 種naw’, 種差faṣl, 特性ḥāṣṣa, 偶有‘araḍを指す。

4 混質の悪化は、等質器官(組織)が正常な混質から外れて何れかの性質が過剰になる場合である。構造の悪化は、複合器官(手や足など)が正常な構造から外れてしまう場合(例えば頭の奇形)である。連続性の分断とは、本来繋がっている単純あるいは複合器官が分断されてしまう場合(例えば骨折)である。

5 後者は純粋に性質のみの異常であり、前者はそれに加えて4つの体液の過剰を伴う場合である。

からのものは、[病因の] 黄胆汁が血管内にあったり、その外にあったりする。

このような区分方法によって、医者是最も普遍な状態——それが病気であること——から、最も特殊な[状態]——それが[例えば] 質料型の混質の病気であるということ、つまり血管内の純粋な黄胆汁からの発熱[であること]——へ辿り着く。そしてこの場合には、最も簡単なかたちで治療が可能になる。類とそれに似たもの、種差とそれに似たものを知らず、類が種差によってどのように種々へ区分されるかを[知らない] 限り、[前述の] この細分⁶を知ることはできない。そのため、医者は論理学についてこの程度知る必要がある。

②医者が必要とする第2の学問は自然学al-'ilm al-tabi'iである。というのも、医学は自然学の分枝の1つだからである。それゆえ、自然学の補助なしに医学の研究の大半は定まらず、明らかにならないのである。

③第3の学問は幾何学al-handasaであるが、医者がそれを必要とするのはごく僅かである。人々は、医者が傷の形を知るために幾何学を必要とすると述べる。なぜなら、円形の傷は治癒が困難だが、三角形やそれ以外の傷は、そこから肉が生える角^{かど}があるとき、治癒が容易だからである。

④第4は天象学'ilm al-hay'a⁷である。医者がこれを必要とするのは、2つの理由からである。1つ目は、暑さが激しい時と寒さが激しい時を知り、下剤を飲ませるのに適切な時はどの時かを知るためである。2つ目は、国々の状態、それらの広さ、惑星との向き合いを知り、そこから町ごとの空気、食料、水の本性を知るためである。

⑤第5は占星の学問'ilm ahkām al-nuğūmである。医者がこれを必要とするのは、いくつかの理由からである。1つ目は、適切な形で幸運のアスペクト⁸

6 Cf. Ibn Sinā, *al-Qānūn*, I, 15.

7 天文学は天体の動きから未来を予測する占星術との密接な関係をもつ。この関係に対する批判をかわすために、天体の運行規則を数学的に探求する側面を強調する「(天の) 形」hay'aの学問が創出された。

8 アスペクトは天体が互いになす角度(黄経の差)のことである。

を取るような選ばれた時に、選ばれた薬品を使用するためである。2つ目は、月の光の増大や減少が、湿の増大や減少に影響することを知り、それを根拠として分利**buhrān**の日とその周期を知るためである。3つ目は、医者が占星学を知っていれば、病気の始まりを真に知る際に、月の状態、[月が]どの天体と合⁹にあるか、どの凶星やどの吉星と共にあるかを知ることができ、また惑う星々の状態を知ることができるからである。というのも、それらの燃焼**iḥtirāq**¹⁰、それらの状態の悪化、それらの吉兆、それらの凶兆、それらの東行、それらの西行は、病気と病人に影響するからである。医者が病人の誕生日を知らなければ、これは [どうなるであろう]。その誕生日を知り、その病気の始まりを知っているなら、起源の星**kawkab al-aṣl**を考察し、諸宮**buyūt**¹¹の状態を知ることができる。そして、病気の絶頂**intihā'**までの時間とその諸宮の状態を考察し、病気が始まった時の上昇宮¹²を考察できるだろう。そこから、病人の状態が行き着くこと、つまり病気の期間が長いか短い、治癒される時 [など] を知ることができる。そして、それを病人の家族に知らせることができるのである。4つ目は、祝福された [星] が上昇しない限り、[医者] 病人を訪ねないように努めるべきだからである。5つ目は、もし悪い時に病人が寝床で寝ていたら、祝福された [星] が上昇するときに、その場所から別の場所へ移動させるべきだからである。

⑥第6の学問は音楽 **'ilm al-alḥān** である。医者がこれを必要とするのは、弦を鳴らすことで指先を鍛え、口ずさむことで理性を鍛え、それによって血管の触診と、脈拍にある音楽の認識を容易にするためである。

⑦第7の学問は予言やト占の学問 **'ilm al-kihāna wa-l-zağr** である。例えば美しいものや幸せそうな顔を見ること、賞讃される言葉を聴くこと、賞讃される性向や性格をもつ動物との出会いなどの [出来事] が、病人のもとに起こ

9 地上から見て複数の天体が同じ位置に見える状態を指す。

10 天体が太陽と同一の方角にあることを指す。この場合、その天体の影響は太陽の強い光のためにかき消されると考えられた。

11 黄道を30度ごとに分割した十二宮を指す。これは天体の位置座標として使用された。病人の出生時や病気の発生時の各天体の位置を知るべきということである。

12 上昇宮は特定の時点において東の地平線に位置し、上昇していく宮を指す。

るようにするためである。予言やト占の方法から賞讃される〔複数の〕ことが一致して病人のもとに起こるとき、それは吉報である。そうでなければ、その反対である。

知るべし。我々は、これらの学問の学習が医学〔の中で〕必要だと言っているわけではない。なぜなら、これらの学問を全く知らずとも、人が医術に長けることは可能だからである。我々が言っているのは、これらのことの知識はその者の医学を助け、その者の能力と技能を補強してくれるものだということである。このことを知るべし。神は最もよく御存知である。

第3章：医者が必要とする性格や属性について

ヒポクラテスが医者に課した規律 $qadāyā$ を守らねばならない。それは10条ある¹³。

第1条。医者は神を知り、神を恐れ、来世と報償と懲罰のことを信じなければならぬ。そして神および来世への信仰が彼に善行をするよう促し、害が降りかかる場を避けるようにさせなくてはならない。というのも、医者は精神の統括者だからである。そうでなければ、彼を信用してはならない。

第2条。〔医者たちは〕自らの師を讃え、彼らが与えてくれた知識に感謝し、自らの父祖へ多くの敬意を払うのと同じように彼らへ多くの敬意を払わねばならない。両親が自分の存在の原因であるように、彼らの師は彼らの高貴さや名声の原因なのである。

第3条。その資格がある者のうちこの技術の学習を欲する者に対して欲深くしたり、彼らからその教授の報酬を求めてはならない。

第4条。医者は病人たちの治療に努め、食べ物と飲み物で彼らを良く処置するよう努めねばならない。彼らを治療する目的は財産の探求ではなく、来世と〔死後の〕報償の探求でなければならぬ。自らの財産から彼らに薬品を用意することが可能であればそうすべきであり、それが困難であれば彼らのためにその処方箋を書くべきである。急性の病気であれば、朝夕と看病

13 以下第6条までは、ヒポクラテスの『誓い』*Iusiurandum* (Littré, IV, 628–633) と共通した内容である。

すべきである。なぜなら、急性の病気はある状態から [別の] 状態へ速やかに変化してしまうからである。

第5条。誰に対しても、致死薬を与えたり、それを処方したり、それを示唆したり、それを話したりしてはいけない。女性に墮胎のための薬品を与えてはならず、誰にもそれを告げてはならない。

第6条。病人の秘密を漏らしたり、近い人であれ遠い人であれ、他人に伝えたりすべきではない。というのも、病人の多くには、医者には告げるが、両親や家族には隠したい病気が起こるからである。子宮の病気や痔のように。

第7条。医者は優しい口調で、楽しい顔をして、治療に意欲的でなければならぬ。また、貧者に対して横柄にしたり、その言葉を聞かないようにしたり、治療において富者と貧者を区別したりしてはならない。

第8条。医者は快楽や贅沢に没頭してはならないし、酒を飲み過ぎてもいけない。というのも、それは脳を害し、[脳を] 余剰物で満たし、理性dihnを失わせるからである。

第9条。より多く読書へ没頭し、読んだものの記憶を魂に刻まねばならない。また、病院や病人たちの居所に通い詰め、師匠たちや有能な医者たちとともに彼らの事情や状態を多く観察し、彼らの状態を多く調査して、それらの状態について書物で読んだことを想起こさねばならない。このように行えば、その治療は正解に近づくのである。

第10条。[他者からの] 指摘や、自分より優れた者の意見を採用することを拒んではならない。何人もの医者と共に病人のもとを訪ねたとき、自分以外の者が真実を指摘したなら、それに同意すべきである。[自分以外が] 真実でないことを指摘しても、彼に恥をかかせることはせず、彼が許されるようにすべきである。すなわち、「述べられたことは、とある人が言ったことである。私としては、治療はこれこれにしたい」と言うべきである。力の及ばない者が頑固に反論してきたら、親切に誤りを教えるべきである。それを認めずに反論を続け、彼の悪行が病人を不安にさせるなら、誤りの箇所を病人とその家族に説明すべきである。

知るべし。医者がこれらの振る舞いと心持ちを遵守すれば、現世での素晴らしい名声、来世での潤沢な報償が得られること、しかも財産と栄光が失われないことが期待できる。これが、[ヒポクラテス]——神が彼に慈悲をお与えになりますように——の言葉から私が伝えたいことである。

[死が必然であることについて]

それでは彼の言葉から、死が必然であることを証明する議論を始めよう。死とは、生来の湿が消失することによって生来の熱 *ḥarāra garīzīya*¹⁴ が消火されることを表現している。まず、知るべし。我々がいるこの世界で死が必然であることについて、人々は合意している。ただし、過去の哲学者気取りども *mutafalsifūn* の一部を除く。というのも、彼らはこの世界に [永遠に] 残ることを可能だと考えて、自分たちのために薬品を用意し、死から解放してくれると彼らが信じていた瓶に入れたからである。ガレノスが彼らについて伝えた通りである¹⁵。

来世は、我々がそこへ必ず復活していくと叡智において論証されているところである。人々はそこで永遠に存続するが、永劫の不幸にあるか、永久の幸福にあるか、一時は不幸だが最後には永遠の幸福になるか、[一時は] 永遠の平穩にあって永遠の幸運へと移っていくかのいずれかであることが証明されている。人々がこれに合意しているのは、①身体の存続を永続させることは不可能だからであり、②またそれは叡智が要請することと矛盾するからである。

①前者は3つの理由からである。

1つ目。身体は複数の部分から構成されている。[それらの部分を] 互いに異なるまま本性が整理し、強制によって集合させている。強制は永続する

14 「内在熱」と訳されることもある。動物が発生した時点で生じ、生きている限り体内に維持される熱を指す。

15 ガレノスが『健康維持について』 *De Sanitate tuenda* で、不死となることが可能だと語る匿名の哲学者 *φιλόσοφος*/詭弁論者 *σοφιστής* に言及している。(Kühn, VI, 63, 399.)

ものではないので、強制するものが無くなると、それらの部分も必然的に分離してしまうのである。

2つ目。身体は、熱と結合した湿った物体によってのみ構成〔が維持〕される。我々が先の議論で説明した通り、それは必然的に蒸発していく。しかし、栄養物は消散していくものの代わりにはならない。栄養物は身体の外からもたらされる物体に過ぎず、外からの物体が身体に付着するのは〔身体に〕類似したものに変容することによってである。これは、それを行うことができる力による。それが物的な力であり、物的な力の作用には終わりがなければならないことは、叡智において論証されていた。〔その力が終わると、〕消散していくものが身体へもたらされることが終わって絶たれるので、必然的に乾燥が圧倒し、身体が生に相応しい状態から外れることになる。

3つ目。栄養物なしで身体が存続することは必然的にあり得ない。それが消散し得ることに加えて、消散させる空気の中に〔身体が〕あるためである。このことが栄養の力を必要とする。栄養の力が作用するのは、論証された通り、生来の熱という道具によってであるが、熱は必ず身体の湿を分解する。そのため、時間が経つと〔熱による〕その湿の分解は強くなるが、その栄養物の供給は強くならない。これは必ず乾燥へと行き着き、それに死が附随するのである。

「時間が経つと〔熱による〕その湿の分解は強くなる」と我々が言ったのは、2つの理由からである。1つ目は、消散させるものと消散するものとの接触が長引くことである。原因がまずあれば、その作用は強くなる。2つ目は、消散させるものが多くの質料に作用する場合、一部の質料が消散すると、〔残りの質料が〕少なくなることである。すると、次の時にはより少ない質料に消散させるものが作用するので、その作用がより強くなる。というのも、作用されるものは作用するものによる影響の強さを減らすからである。「栄養物の供給は強くならない」と我々が言ったのは、〔次の理由〕からである。物的な力は時間の経過によって弱まらないということを我々は認めるが、消散させる〔力〕として強まるわけではない。力が増さなければ、

その栄養物への作用も増えることはない。ここで、「作用するものが長引くことで、その影響が強まる」と言うことはできない。なぜなら、栄養の力の作用は1つの栄養物に対して長引くわけではないからである。作用するものの作用が長引くことで強まるというのは、作用されるものが1つのときだからである。「乾燥に死が附随する」と我々が言ったのは、生は生来の熱のことであり、生来の熱が成り立つのは生来の湿によってだからである。乾燥が起こるとその湿は失われ、生来の熱が消火されてしまう。というのも、その湿は〔生来の熱にとって〕ランプの油に等しいからである。それには、水のような外的な湿の生成が附随し、2つの理由から、生来の熱の消火に繋がる。1つ目は、窒息や水浸しによって。2つ目は、性質における対立によって。なぜなら、この湿は冷たく粘液質だからである。

②後者〔叡智の要請と矛盾すること〕については、4つの理由による。

1つ目。もし人間の個々人が終焉なしに存続したとすれば、我々に先行して存在する人々が、生成のもととなる質料を使い果たしてしまっていて、我々が存在するための質料は〔残されて〕いなかっただろう。もし我々に質料が残されていたとしても、場所が残されていなかっただろうし、食糧も残されていなかっただろう。我々も、我々の後〔に存在するはず〕の者たちも、永遠に存在しないままであり続け、先の者たちが永遠に存在し続けるだろう。これが特別な理由のない最頂であり、叡智に矛盾するものであることは疑いない。したがって、先行して存在する者は、後から来る者が存在するための場所があるようにするために、死ぬのでなければならない。

2つ目。もし死が必然でなければ、不義なる為政者が現世に永遠に残ることが許されて、その悪と背徳が続くことになってしまう。これは必ず、叡智の要請からの逸脱や腐敗へ行き着く。

3つ目。もし死と復活が必然でなければ、不正を受けた者は不正を行った者の応報を望むことはできず、不正を行う者にその悪を控えさせるものが無くなってしまふ。このことが叡智の要請と矛盾することは疑いない。

4つ目。もし死と復活が必然でなければ、敬虔な者たちや善人たちが惨めであるだろう。なぜなら、彼らは現世を苦しむのに、その報償が無いからで

ある。このことが迷いへ、快樂の追求や〔快樂〕以外の拒絶へ誘ってしまうことは疑いない。このようなことは間違いなく、腐敗であり悪である。

〔これら〕4つの理由に対して、既に多くの反論と、それらに対する大変冗長な回答が提示されてきた。我々は〔この書物を〕簡潔にするために、それらについて語るのを基本的な諸学問に任せようと思う。

〔知るべし。アッラーマ（シーラーズイー）は次のように語った。〕¹⁶

最も多く起こる病気は発熱であると我々は言う。そこで、そこにおける死の時について説明しよう。発熱の場合、その増大の初め〔の時〕である。なぜなら、この時がその分利の時だからである。ただし、本性が病気に敗北するために、発作の終わりの時まで遅れることもある。あるいは部分的な鎮静の時である。ところで、「部分的鎮静で死が起こるなどどのように想像できるのか。『鎮静』が意味するのは、身体の力が病気の質料を支配したこと、それを徐々に消滅させ始めたことである。力が〔病気の質料を〕支配した際には、人間の本体から〔見て〕、死が警戒されることは決して無い。貴方も知っての通りである」と言われたら、我々は言おう。ここで「鎮静」が意図するのは、病気が落ち着くことであり、よく知られた鎮静のことではない。この落ち着きが、時として〔身体の力が〕質料を支配したため——これは真なる鎮静である——であり、時として病気の質料が身体の力を支配したため——これは真でない鎮静である——であることは疑いない。この後者が、ここで意図されたことである。真なる〔鎮静〕は真でない〔鎮静〕から、5つの点で判別される。①脈拍から。乱雑なものから、均等で規則的で強いものへ〔変わっていく〕のが真なる〔鎮静〕であり、真でない〔鎮静〕はその反対である。②〔質料の〕熟成から。③〔気分の〕軽快さや高揚から。④汗から。⑤症状から。例えば、真なる〔鎮静〕では正常な理性がある。〔鎮静における〕死の徴候として無感覚、質料の沈み、汗の冷たさがある。これは記憶に留めておくべきである。

〔現世での〕存続の事情がこの通りなので、唯一無二のヒポクラテスは

16 校訂版において写本の欄外注から復元された文章である。

『箴言』 *al-Fuṣūl* の冒頭で言った。「人生は短く、技術は長い。」¹⁷つまり、[人生と] 比べて [この技術が長い] ということである。

知るべし。名簿の大半は60歳と70歳の間である。預言者は言った。「私のウンマの寿命はその多くが、60歳から70歳の間である。」¹⁸ある [別の] 伝承では、「運命の戦場は、60歳と70歳の間である」¹⁹とやった。ここから、アラブ人たちはそれらの10年間を「首を折るもの」*daqqāqat al-riqāb* と呼んだ。最も長いのは120歳である。年代記に現れ、神の書物が保証している長い寿命の記録は、おそらくヒポクラテスの時代以前のことである。学者たちはこれに異なる説明をしてきた。医者たちは、[当時の] 1年の日数が我々の1年の日数より少なかったからだと言う。占星術師たちは、その時代における天体の配置が長い寿命を引き起こしたと言う。信仰の指導者たちは、人間という種の個体数が少なかったために、神の叡智が長い寿命を要請したと言う。いずれにしても、このことについての議論は医者目標から外れている。神は最もよく御存知である。

議論：健康維持の学問の目標に関する証明について

健康維持の学術は、死からの保護と防護を保証する学術ではない。というのも、死の必然性について説明されたことのために、それはあり得ないからである。身体は外的な害、例えば溺れ、窒息、火傷、破壊、剣の攻撃などを [完全に] 逃れることはできない。医者は必然的ではない外的 [要因] を排除する手立てをもたないのだから、空気による消散のような必然的な外的 [要因] を排除する手立てや、生来の熱による消散のような必然的な内的 [要因] を排除する [手立て] をもたないのは、それ以上に当然である。また、人々が語るように、人間としての無条件の長命、つまり120歳という目的を、全ての人に達成することでもない。というのも、これは不可能だからである。なぜなら、死——それが必然であることは証明されている——を引

17 Littré, IV, 458.

18 Ibn Māḡa, bk. 37, 4377; al-Tirmidī, bk. 48, 3550.

19 「六書」には該当のハディースは見つからない。

き起こす消散は、各個人の混質の準備が異なるために、異なるからである。それゆえ、必ず消散してしまうものの量は個々人で異なる。もし医者がこの違いを無くせるのであれば、死を完全に排除することができるだろう。それは、その準備を完全に無くし、消散するものを [外から] もたらされるものの量に [合わせる] ことによる。このことは正しい。

しかし、アッラーマ [シーラーズイー] 曰く、ここには4つの疑念がある。

1つ目。もし医者が真に役立ち、その目的が健康を維持し持続させることであるならば、ヒポクラテスのような優れた医者は、健康を維持しその状態を持続させることによって、自らの死を防ぐことができたであろう。しかし、事実はそうではない。これについての回答だが、ここでの問題点は、一部の [人が] 憶測するように、死の排除を医学の目的に含めたことである。なぜなら、死の排除は医学の目的ではないからである。そうではなく、医学の目的は腐敗を抑制し、根本的な湿を可能な限り消散から保護することだからである。これは6つの必然的なこと²⁰の運用による。

2つ目。医学は役に立たない。なぜなら、健康と病気と死はいずれも、いと高き神の意志、永遠なる知識と力によるものだからである。回答が伝えるのは、学者たちの集団によるこの解決は、正しく医学を運用することが可能ということである。いと高き神は健康を定めるように医学の運用を定め、死を定めるように医学が必要なところでの逸脱を定める。そして [神は] 医学の運用を健康の原因、その不 [運用] を死の原因とした。もしそうでなければ、食べ物と飲み物の摂取から解放されて然るべきだろう。

3つ目。医者たちは治療の原則とその細則の多く、この学問に関連する探求の多くが推測的で憶測的なものであると [合意している]。医者集団が病人の治療のために集まり、彼らから1人1人²¹ [病人の前に] 出たときに

20 必然的なこととは、「必然的原因」や「非自然要素」などと呼ばれる一連の事柄である。イブン・スィーナの『医学典範』に従えば、それらは空気（環境）、食べ物と飲み物、運動と静養、心理的現象、睡眠と覚醒、排出と保持である (Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, I, 113)。

21 校訂版の「*wa-uhīda*」を、『注釈』写本から「*wāhidun*」と修正して読む。

は、それぞれは他人が処方しないことを処方して、彼らの間には減多に合意が成立しない。学問の状態はこのようなものであり、その持ち主の誤りはその人が正解に至るより多い。このようなものは全く必要とされない。なぜなら、その人の状態は、学識や知識をもたずに物から物へ試して回る者の状態と等しいからである。ヒポクラテスの語った通り「経験は危険である」²²。[これに対する] 回答は [次の通りである]。前述の欠陥や、隠された身体の状態が隠されていて、治療の原則の多くが推測や憶測となっているのは、学術それ自体の欠陥のためではなく、その細則や原則の把握を求める者が然るべく [行動] できないからである。そのため、医者たちの集団には病人に指示する治療について相違がある。なぜなら、[医者]の2人がそれぞれ把握する病気の知識や症状は、他方が把握するものと異なるからである。そのため、真理に到達したmuḥaqqiqūn医者たちが集まるときには、治療の1種について彼らの間に合意が成立する。

4つ目。達者な医者や知識において有能な者でも人間の身体に現れる全ての害を排除することは不可能であることを、我々は見ている。このような状態にある知識は必要では無い。というのも、それに専心するのは、徒勞であり無意味だからである。[これに対する] 回答は [次の通りである]。全ての症状や害を身体から排除することができないのは、学術の欠陥のためではない。それは、身体がその本体と本性において破壊が起り、排除し得ない害を受けるものだからである。神は最もよく御存知である。

そうではなく、健康維持の学術は [次の] 2つのことを保証するものである。①湿の腐敗を根本的に防ぐこと、②消散が早まらないように湿を保護すること。これは、消散する身体全体の湿を、その混質に応じて必要な量だけで余分がないようにすることによる。その [湿] あるいはその身体に外部から腐敗させるものが出現しないなら、湿が要請するだけの期間で存続することができる可能性がその湿にはある。その期間はその最初の混質に応じて、早すぎることも、遅すぎることもない。というのも、個々人の混質の相

22 上注17参照。

違が〔湿の〕多寡の違いを必然に引き起こすために、個々人の湿は根本的に相違するからである。そのため、本性的な寿命とその運命は異なる。腐敗の妨害と、湿の保護つまり前述の期間で湿を存続させることは、3つのことによる。

1つ目。食べ物や飲み物の処方をして、消散と等しいものがもたらされるように、多すぎも少なすぎもしないようにすること。というのも、多すぎるときには、それが熱を溺れさせて鎮火してしまうからである。それは、多すぎる油がランプを溢れさせ、火にくべられた多すぎる燃料のような状態となる。食料自体が熱性のものであったとしても。そのため、ブドウ酒の過剰な使用は生来の熱を溺れさせてしまう。しかし少なすぎれば、消散されるものの代わりとならない。これについては大師〔イブン・スィーナール〕が、消散されるものを可能な限りの量で身体を補うための正しい処置として、指摘している²³。

2つ目。乾燥を早める原因*asbāb*を、それを早める原因——例えば熱すぎる空気や激すぎる運動——を適正化する有効な処置によって、排除すること。ただし、空気の熱のように乾燥を必然に引き起こす原因は除く。というのも、それを防ぐことは不可能だからである。

3つ目。腐敗を防ぐことと、〔それが既に〕生じているのであれば、止めること。これは、身体の内側でも外側でも、異常な熱に圧倒されることから身体を保護し警戒することで腐敗が生じるのを防ぐ²⁴処置による。というのも、あらゆる身体が根本的な湿や根本的な熱の力において等しいわけではないからである。それらの混質の相違が、それぞれの混質に合致する熱と湿と、〔その混質が〕要請する力を必然に引き起こし、〔その混質が〕越えられない極限と限界があるために、身体はそれらにおいて相違するからである。あらゆる身体には、湿に対する熱の圧倒に附随する乾燥に耐えられる限界がある。その限界は発生の最初から要請されており、〔各身体の〕生来の湿の量、その混質、その生来の熱を、その身体は超越することができない。しか

23 Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, I, 201.

24 校訂版の「wāfi」を「wāqī」に修正して読む。

し、身体はその限界に達しないうちから、[その限界を]外れていることがあり得る。そのために大師は、乾燥を助ける原因とは「異なるかたちで、助ける原因が破壊する原因が現れることで、限界が身体を先取りする」と言った²⁵。また多数kaḥfīrの人々は言う。「自然な寿命とはこのことである。つまり、生来の湿の消失による生来の熱の消火である。乾燥を助けて早める原因が現れたことによる消失であったとしても。」しかし、大多数aktarの人々は、前述のことについて、「自然な寿命とは生来の熱と生来の湿の消失が乾燥を引き起こす原因であることによるのであり、それを早める [原因によるもの] は違う」と反論している。

多数の人々と大多数の人々という2つの派閥の違いは、早める原因によって [起こる] ことが多数派の場合は本性的なものにあり、大多数派の場合は「偶性的」‘araḍīと呼ばれる燃焼にあることである。また、偶性的寿命は別のもの、つまり湿の消失による熱の消失ではなく、それ以外のことによるものだけということである。健康維持の術は、それを達成させるために [身体に] 関するものうち6つの原因²⁶やそれ以外から適切なものを維持して、人間の身体を「自然な寿命」と呼ばれるその年齢まで到達させるものである。なぜなら、健康が維持されるのは、あらゆる時あらゆる年齢において、適切なものや類似するものを用いることによってだからである。消散と腐敗から湿を護ることは2つの力に委ねられていて、医者はそれらに奉仕する。

1つ目は、自然的な [力] である。これは栄養の力で、その実体において土と水が優勢なためにそれらに近寄っているものから消散するものの代わりを補うためのものである。なぜなら、この力は栄養物を栄養されるものに同化させ、身体から消散するものの代わりをこの同化によって補うことができるからである。2つ目は、動物的な [力] である。これは心臓と動脈を拡張によって動かす力である。というのも、この力は血液の希薄な部分から希薄で光のような実体を生み出すものだからである。これが、生命を成り立たせ

25 Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, I, 202.

26 前述の6つの必然的原因を指す。

る動物的な力を運ぶ動物精気rūh ḥayawān²⁷である。このため、大師は「消散するものの代わりを補うためである。その精気は、その実体が空気性であり火性である」、つまりこれらの元素が優勢なものであると言った²⁸。これら2つの力は、身体が生きている間の〔身体の〕統制を任されたものであるから、医者はいずれかを気にかける必要がある。

前者〔自然的力〕については、身体にもたらされるものを消散するものと等しくし、多くも少なくもしないことによって、またその養育やそれに対する欲²⁹の傾向を見守ることによる。要するに、食料による健康維持の方法について君が覚えていることである。後者〔動物力〕については、心臓に届く空気がゴミも無く清浄で、純粹で、冬には適度に冷たく、夏には冷たくなるように努めることによる。

前述の2つの力の状態は我々が述べた通りである。栄養物は栄養されるものとあらゆる観点で似ているわけではなく、そのため身体にもたらされる栄養物と心臓に届く空気には必ず余剰物が余計にあり、そしてその余剰物が身体の中に残れば何日もかけて集まり、熱を溺れさせ、力を征服し、諸器官を支配してしまうことを君は知っている。それゆえ創造主の優しさによって、それが集まる通路、〔それが〕そこから排出される経路、それを身体から掃いて押し出す力が造られた。そのため、「身体は王の家に相当し、そこには従者や衛兵、従者の奉仕や家を任された者がいる。そのうちの1人は従者の必要を満たしてそれを彼らに与えるため、別の人はもたらされたものを受け取って、利用し活用できるまで保管しておくため、また別の人はそれを利用して活用して人々に分け与えるため、さらに別の人は家にある必要の無いものを掃除して排出するためにいる」と言われる。ここでいう王は身体を統御する力であり、家は身体であり、従者は主要な諸器官であり、召使いは4つの奉仕するもの、つまり吸引する〔力〕、保持する〔力〕、消化する〔力〕、

27 人間の体内にあると考えられた「精気」と呼ばれる3種の物質のうち、心臓で生成されて動脈内を流れ、生命を維持する力（動物力）を運ぶものである。

28 Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, I, 202.

29 校訂版の『*ŠHWRH*』を『注釈』写本に従って「*šahwa*」に修正して読む。

排出する [力] である。このような配分による神の優しさと思ひやりに目を向けよ。

身体の構造が弱いこと、内外から害を受けることが [神の] 知識に前もってあったので、[神は] その統御を前述の力に任せ、その食料が集まるための特有の通路がある意図——君は既に知っている——のために用意し、また余剰物がそこから排出されるための特有の経路を [用意した]。神を讃えることは被造物にとって最も良いことである。

知るべし。基礎的な事柄は、健康維持の学術において君が行うのは、一般的で必然であり共通で必至の原因を調整することにあるということである。というのも、人間はその人生の間でそれらを運用しなければならないからである。なぜなら、それらは然るべく用いられていれば健康の原因になり、そうでなければ病気の原因になるからである。これらの原因についての考慮の大半は、7つのものの調整である。

1つ目。空気やそれ以外を通じて新しく換気することで、混質を調整すること。2つ目。摂取するものを選別し、摂取するものと消散するものを一致させること。3つ目。余剰物を洗浄して、胃に負担をかけたり、[胃が] それらをため込まないようにすること。4つ目。構造を保護して、構造を変化から維持すること。5つ目。精気を強めるものを用いて、吸気を正すこと。6つ目。平衡なものうち熱と湿を清めるものを用いて、着るものを正すこと。7つ目。消散させるものが過剰になったり、硬化させるものが過少になったりしないようにして、身体的運動と精神的運動を調節すること。睡眠や覚醒は何らかのかたちで運動に入る。覚醒は運動に非常に似ており、睡眠は静養に非常に似ている。

君は混質について、平衡が1つに定まらず、また健康もそうでないことを知っているだろう³⁰。それは、それらがそれ自体としては定義されず、それぞれ過剰と過少の両極端の間に幅³¹があるからである。ここの幅は多く、健

30 校訂者が修正した「li-l-i'tidāl」と「li-l-ṣiḥḥa」ではなく、写本の「lā al-i'tidāl」と「al-ṣiḥḥa」で読む。

31 校訂版の「ḡarad」を「'ard」に修正して読む。

康は個々人の混質の相違に応じて、彼らにおいて「何かを」必要とするはずであることが分かる。そのため、この学術が個々人の健康を等しいものにすることは不可能である。そこからまた、「この学術は」健康と若さを維持することはできないということが附随する。そうでなければ、それは死を排除することができるだろう。というのも、その年齢が要請する通りに健康を持続させることは、もしこれが可能であれば、それを常に延長し続けることが可能で、乾燥が附随しないからである。すると、死を排除することが可能ということになる。

しかしだからといって、混質の全ての幅が、何かしらの健康であるか平衡であることに関与するわけではない。事実は「これら」2つの事柄の間にある。それは、健康的な混質が1つの混質のみではないということによる。あらゆる混質が健康であるということはある得ず、いくつかの混質はそうであり、その「いくつか」が多いのである。神は最もよく御存知である。

これについて大師が指摘して言った。「栄養物が栄養されるものに現実的に類似していないのだから、栄養物を栄養されるものに現実的に類似させて、さらに言えばそれを現実的に真なる栄養に変化させるために、変化させる力が創られた。なぜなら、真なる栄養とは、ヒポクラテスが然るべく想定したものである。」³²

それ以外のものについては、比喩的に栄養と呼ばれているに過ぎない。大師曰く。「栄養物を現実的に真なる栄養にするために、道具と経路が創られた。」³³それは、血液、吸引、十分な消化である。「栄養物が」本性において、意図されたところに一致していないとしても「真なる栄養とできるように」。力とそれら道具は身体の中に必然的にあること、健康維持において必然なものは、健康維持において考慮しなければならないものであることを知るべきである。

本稿はJSPS科研費JP17J01081による研究成果の一部である。

32 Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, I, 202.

33 Ibn Sīnā, *al-Qānūn*, I, 202.